
興奮の訳

勝目博

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

興奮の訳

【Nコード】

N6037D

【作者名】

勝目博

【あらすじ】

疲れ切って戻った我が家。エアロビに汗する妻に興奮の炎が燃え出した。

疲れきった身体に最後にムチを打ち、自宅への階段を登った。

中間管理職などなりたくはなかった。

それでも誰もが通る道だと思い、我慢してきた。その我慢も限界に近づいていた時だった。

今日も散々上司に小言を言われたのだ。課長などにはなるものではない。

しかしなぜ小言を言われたのかは覚えていなかった。毎日のことだから仕方がないだろう。

ただ、嫌われているだけかも知れないが、別に気にすることでもなかった。

それは私も上司を嫌っていたからだ。ねちっこく、些細なことも大げさに捉え、

私を責めるのを楽しんでいるように感じていたからだ。

「ただいま」

力なく帰宅を知らせるが、妻は返事もしない。それほど大きな家ではない。

聞こえているはずだ。風呂にでも入っているのだろう。ところが風

呂は真っ暗だった。

不安はなかった。妻とは上手く行っているのだ。

居間に向かうと妻はテレビを見ながら踊っていた。ダイエットだろうか、

ヘッドホンを付けて画面と同じように踊っていた。結婚三年目になるが、

私は妻を愛していた。妻も私を愛してくれている。私は声もかけずにしばらく見つめていた。

綺麗な身体は結婚当時のままで、流れる汗さえ美しく見えた。

画面と同じ動作で振り向いた時、妻はようやく私に気がついた。

驚きに満ち見開かれた瞳は、やがて笑いに包まれ瞼の中にほとんど隠れた。

笑うと目は細い筋になる。

「お帰りなさい、早かったのね」

妻はヘッドホンを外し私に抱きついた。甘酸っぱい汗が私の鼻腔をくすぐった。

いまだに出勤時と帰宅時にはキスを欠かさない。

汗によって肌に張り付くＴシャツが、私の欲望を奮い立たせた。

最初は優しくそして激しくキスを交わした。妻は驚きの声を上げた。それほどまでに私自身は大きく張り裂けそうだった。

「どうしたの」

そう聞きながらも、妻は私自身を撫ぜ回した。

ズボンの上からでもはつきりとその形は確認できた。

Tシャツごと妻の胸を鷲掴みにし更に激しいキスを交わした。

妻の息は運動とは異なるテンポを繰り返し始めた。妻の後ろに回りこみ、

髪を掻き上げ耳にキスし、首筋に唇を這わせて頬から唇に重ねた。

両手は二つの胸の上で優しく、時に激しく踊りを踊る。妻は腰を回し私自身に刺激を与えた。

妻は後ろ手でズボンのベルトを外し、チャックを下ろした。

くるりと振り返ると勢い良くズボンを下ろした。同時に私はYシャツを脱ぎ捨てた。

ボタンなど外しもしない。四方に飛び散ってしまっただろう。

妻は私の弾けそうに脈打つものを取り出し優しく口に含んだ。

私はなぜにここまで興奮するのかわからなかった。いつもどおりに仕事をこなし、

いつもどおりに帰宅したはずだが、私のものはいきり立っていた。

妻のＴシャツも乱暴に脱がし、私はむき出しの胸を揉み出した。

妻の口から切ない声が漏れた。それでも妻の舌は容赦なく私を責め続けた。

妻を乱暴に立ち上がらせ後ろを向けると、私は一気に下着と一緒にズボンを下ろした。

こういう場合、スエットスーツはあっけなく大事な部分をさらけ出してしまふ。

私は勢い良く妻に突き立てた。妻は声を殺し喘ぐ。その姿を見下ろしながら、

私は動きを早めた。

ところがいつもならばあっ気なく果ててしまふはずの私だが、一向にその気配は訪れない。

妻は早くも一度目の絶頂を迎えたにも関わらずだ。ただ私は動き続けた。その時だった。

玄関のドアが激しく叩かれ、妻は私から離れて行った。

私は邪魔されたことに怒りを感じそのままの姿で、玄関に向かった。

「あなた、何か着て」妻の叫びに私は答えた。

「ここは、私の家だ、どうしようと勝手だ」私自身は尚も激しく脈打っていた。

「誰だ」私はドアスコープで確認もせずにドアを開いた。

そこには5人の男が立っていたが、私を見るなり一瞬後ろに下がった。

素っ裸で股間をいきり立たせていれば仕方のないことだ。

直ぐにそのうちの一人が進み出て私に尋ねた。

「山田和樹だな。石山健一殺害容疑で逮捕する」

その時私の頭に石山部長の顔が浮かんた。そして思い出された記憶に残るその最後の顔は、

確かに私に命乞いをしていたのだ。私は笑った。大声で笑った。

自分が興奮している意味がようやく理解できたのだ。

くそつったれの上司が死んだことに思わず笑ったのだ。

ただ一つ残念なことは妻の中で果てることが出来なかった。それだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6037d/>

興奮の訳

2011年2月3日18時05分発行